



馬耳東風

「4, 50人ほどの者がおり、一人の者が立って、大音声にののしり、手真似をし、狂人のごとし。何か言い終わってまた一人立つ。その様、わが日本橋の魚市場のごとし」日本人がはじめて見た米国議会の描写だ。日米修好通商条約批准書交換のため抜擢され、幕府の命を受けて遣米使となった外国奉行副使・村垣淡路守範正が綴った「遣米使日記」(国会図書館デジタルライブラリー)はカルチャーギャップと言われるが実に興味深い。開国を迫られ大政奉還に打って出る6年前の安政7年(1860)1月18日に船出し、8カ月余を掛けて地球を一周した武士官僚の日記である。品川からポーハタン号へ総勢77名が乗船し、日本の咸臨丸(艦長・勝麟太郎)が伴走した。船酔いと水不足に苦しみながら15日目にハワイに着く。土着人女性は色が黒く髪を巻きつけてまるで鬼のようで、カメハメハ4世王妃エンマは薄物と首飾りで生きた阿弥陀仏に見え、歓迎の娘のピアノの弾き語りが犬の吠え方に聞こえた。ハワイを3月11日に出発して48日目にサンフランシスコ上陸。歓迎の祝宴がまるで鳶人足の酒盛りのようににぎやかであった。パナマから蒸気機関車でアスワンヒルに、軍艦でワシントンに出て群集の歓迎を受け、まるで江戸のお祭りのように思えた。大統領ブキャナンに面会。役職により狩衣・布衣・素袍着用で臨み通訳は正装した。群集が珍しそうに見るので皇国の威を輝かせた気がして誇り顔になった。大統領への贈呈品は、太刀・蒔絵の馬具・掛け軸・屏風・緞子で博物館所蔵になるそうだ。接待のダンスは男

女が組んでコマネズミのように回るだけで風情がなくあきればかりで、女子の眼の色がかわり髪の色は犬のようで興ざめた。歴代大統領の胸像が並びまるで日本の刑場のように思えた。ペリー提督宅を訪問したが、女性上位で、主人はまるで下男のようなようだった。帰路はナイアガラ号で5月13日出港、アフリカでアメリカ船が黒人600人を買収していた。釈迦は黒人の酋長なのだろうか。袈裟を着、椰子を椀とするのを見て托鉢に用いる事笑うに堪えない。7月11日喜望峰を越える。ジャワ、香港を経て9月27日江戸へ到着した。元号は万延になっていた。1年が一日増えたのは一生の得。12月1日格別の骨折りとして500石の功勞加増で、天領の武州上谷ヶ貫村を知行したが、この頃村の鎮守本殿が再建されている。その後、日普修好通商条約締結に当たり、全権として調印に臨んだ。アメリカ各地で熱狂的な歓迎接待を受け、沈着冷静に日本人が見た世界を地味に比較考察し、実に分かりやすい微笑ましい価値観で捉えた。間もなく幕府は政権を譲ったが、短歌や算盤を織り交ぜながら高い教養の武士道があり、世界を見ていたことは日本の誇りとし大いに評価したい。また、「万延元年遣米使節図録」(国会図書館デジタルライブラリー 田中一貞編)とあわせると興味深く理解しやすい。日本の個性的な武士道文化が輝いている。今年はくしくも明治150年である。

ましら(猿)まで 姿ことなる異国に
かわらぬものは夕月の影

(村垣淡路守日記 1860)

(柏)